

北海道大好き！～アイヌ語ゆかりの北海道の地名（第12回）

当社は、7月12日に白老町にオープンしたアイヌ文化復興等に関するナショナルセンター「民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)」の「官民応援ネットワーク」に参画しています。

先住民族が使っていたアイヌ語を起源とした地名が多く残る我らのふるさと北海道。北海道で使う電気を生み出している発電所所在地の地名などについて、その由来をご紹介します。

第12回目は、新冠町の発電所です。

新冠(ニイカッ)

当社は、戦後から高度経済成長期にかけて伸び続ける電力需要を支えるため、水源が豊富な日高地方において日高一貫電源開発として多くの水力発電所を建設しました。

特に幌尻岳に源を発する新冠町内を流れる新冠川には4つの水力発電所があり、上流から、奥新冠発電所(出力44,000kW)、新冠発電所(同200,000kW)、下新冠発電所(同20,000kW)、岩清水発電所(同15,000kW)が電力の安定供給に大きな役割を果たしています。

さて、その中で1974(昭和49)年に完成した新冠発電所は、当社初の揚水(ようすい)式発電所です。揚水式発電とは、上部調整池と下部調整池を造り、電気の消費の少ない時に水を上部調整池へ汲み上げておき、電気の消費の多い昼間に上部調整池の水を下部調整池に落として発電する方式で、電気を水の形で蓄えておく蓄電池のような役目を果たします。

上部調整池に溜めた水のみを利用する「純揚水式」と、河川から上部調整池に流れ込む水も利用する「混合揚水式」があり、新冠発電所は「混合揚水式」です。

さて、「新冠」については、ニカッ°(ni-kap 木の皮)に由来するとされます。これは、この地でアイヌの人々が着ていた楡皮(ニレ科の樹木のオヒョウの皮)の服を指したものとされています。ただ、この説はそれ以前に、新冠川の河口にそびえたつ判官館(はんがんだて)という大岩のことをピボク(pi-pok 岩の下)と呼んでいたのですが、和人にはピボク(卑僕)と聞こえて音が良くないとのことで、ニカッ°と呼ばれることになったとも言われているのです。

(出典:山田秀三「北海道の地名」)



新冠ダム(発電所はダム下流部)